

【女流万葉歌人・大伴坂上郎女と大宰府】

大伴旅人の異母妹である大伴坂上郎女は『万葉集』中の女性歌人の中では群を抜いて多くの作品を残している

・坂上郎女は筑紫げこうに下向していたことは万葉集巻6―963、4の題詞に「冬十一月大伴坂上郎女、帥そちの家を発ちて道に上り・・・」とあり、ここから天平二（730）年十一月に太宰帥・大伴旅人邸を発ち帰京の途についたことがわかる。

・坂上郎女の筑紫への下向は旅人が妻をなくした後、年少の家持の面倒やその家事などを見たものかと考えられている。つまり旅人の妻の没後は名門大伴一族の家刀自（主婦）的存在にあつた。と見られる。

●坂上郎女が大宰府にいた頃の作かと考えられている歌に大伴坂上郎女に贈った「大宰大監大伴宿禰百代四首」と題する歌とそれに応えたとする「大伴坂上郎女歌二首」と題する歌がある。

・これらの歌は伊藤博著「万葉集釋注」によると「大宰府のある遊びの宴で、大伴百代が「恋する老人」の立場で披露したのがこの歌群で、大宰府官人の百代は実際にはそれほど老年であつたとは思われないと記す。この百代の恋の歌四首（巻四―五五九―五六二）の内の一

に次の歌がある。

みかさ もり
「御笠の杜」

（老人の恋）

思はぬを 思ふと言はば 大野なる

みかさ もり

御笠の杜の 神し知らさむ

卷四―五六一 作者 大伴百代ももひよ

（解説）あなたのことを思いもしないのに思うというならば、うそいつわりに厳しい大野の御笠の杜の神様もお見通しで、私は崇たりをうけなければなりません。

・この歌にある「大野なる御笠の杜」は大宰府政庁跡（現太宰府市観世音寺）から西へ9 km程離れた今の大野城市山田2丁目―四に民家に囲まれた小さな森がある。ここが「御笠の杜」である。

・御笠の地名の由来については日本書紀神功皇后紀の仲哀天皇九年三月の条に「皇后の御笠がつむじ風が、急に起こって、吹き飛んで落ちたとある。そのゆかりの地により、そこで時の人は、そこを名づけて御笠（筑前国御笠郡）といった。」と記す。

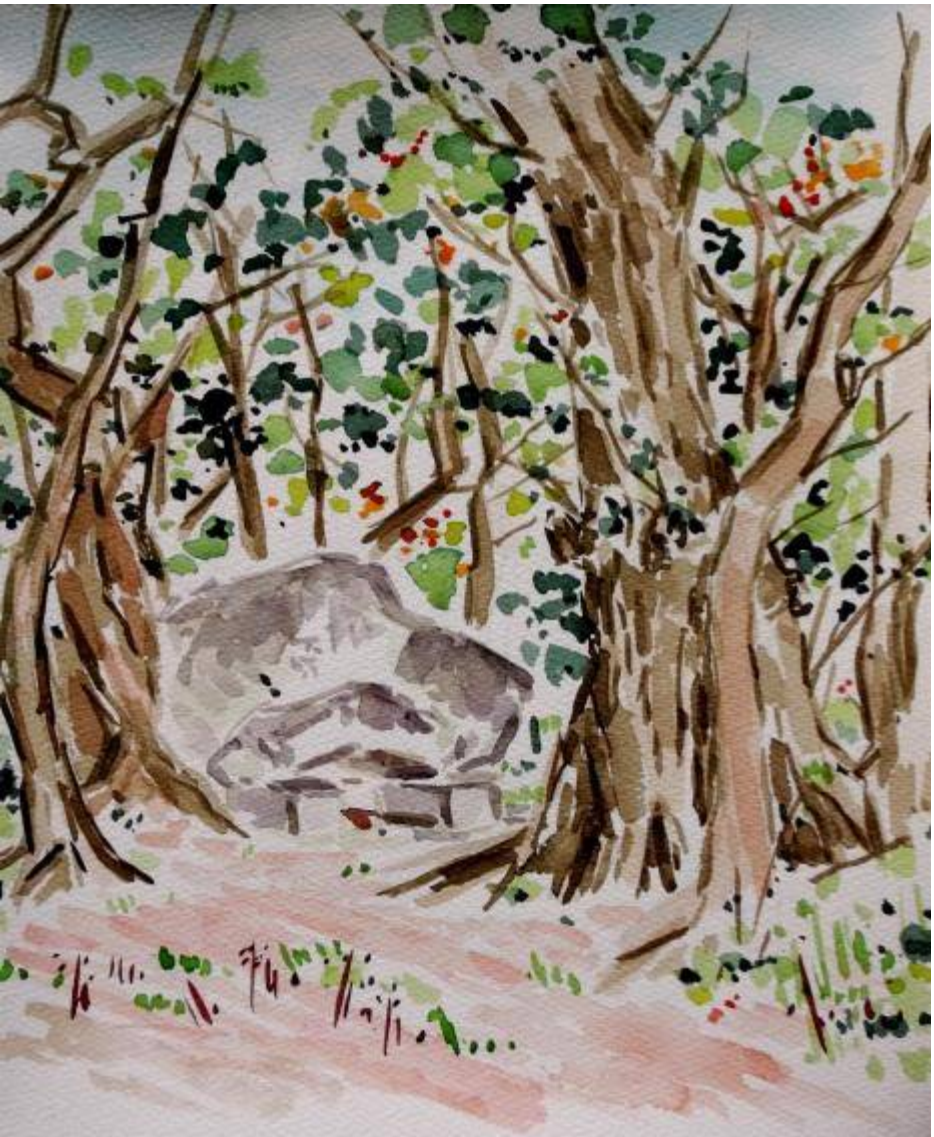
・万葉時代には有名な森で、大宰府の官人たちもよく知っていたから大伴百代が「御笠の杜」と詠んだとの説がある。

○作者大伴百代には類歌が多く、この歌も奈良の大和三山の一つ畝傍うねび山の近くの地名で詠われている「思はぬを思ふと言はば真鳥住む雲梯まどり うなでの杜もりの神し知らさむ」(巻十二―三二〇〇)の「真鳥住む雲梯まどり うなでの杜」を「大野なる御笠の杜」に変えた民謡風の類歌であることから、この歌をふまえて官人の宴席などで即妙にうたわれたとの説がある。

この「御笠の杜」へは西鉄大牟田線「雑飽隈駅おつしほのへ」から東北1・2km程の旧御笠郡(今の福岡県大野城市山田)に民家に囲まれた小さな森がある。ここが今、大野城市の有形民俗文化財と天然記念物に指定されている「御笠の杜」である。以前はもつと広い森林であったようであるが、いまは宅地造成により、狭い森の中には小さな祠ほこらと自然石の万葉歌碑が建っている。

・この森に伺った時には、幼稚園児がどんぐりひろいで歓声をあげながら楽しんでいた。また、この地域の上空は福岡空港への離着陸コースになっているため時々飛行機の騒音がひどく、万葉に歌われたような風情はみあたらなかった。

(写生地)御笠の杜(大野城市山田2丁目四)の風景を描く。(杏花)



●万葉集には大伴百代の恋の歌はこのほか次の三首がある。

・事もなく い 生き来しものを こ 老いなみに お にかか

る恋にも あ 我はあへるかも れ 卷四一五五九

・恋ひ死なむ の 後は何せむ ち 生ける日の い ためこ

そ妹を い 見まく欲りすれ も 卷五一五六〇

・暇いとまなく 人の眉根まよねを いたづらかに 搔かかしめ
つつも 逢あはぬ妹かも
卷五―五六二

●伊藤博著『万葉集釋注』には、この大伴百代の歌群、特定の人を意識しているわけではあるまい。宴席などで、あくまで「恋」の歌として文雅の遊びのもとに発表したにすぎないものであろう。しかし、この歌群に反応して誰かが、「老いらくの恋」の歌をうたえば、その人がその場の仮の相手になる。この場合は、うって返した人が大伴坂上郎女で、次の歌と見られるとある。

●万葉集に大伴百代の歌のあとに大伴坂上郎女の次の一首がある。

「大伴坂上郎女歌」く老女の恋く

黒髪しろかみまじに 白髪交り 老ゆるまで かかる恋には
いまだ逢はななくに

卷四―五六三 作者 大伴坂上郎女

(解説) 黒髪に白髪がまじるこの老年になるまで、これほど激しい恋心にせめられたことはなかったのですよ。

○この歌は大伴百代の巻四―五六―に代表される一連の「老人の恋」
に対して、「老女の恋」の形で答えたもので百代と坂上郎女との恋と
はきめられなくこの歌も恋の遊び歌で宴席などで詠まれたものとい
う説が多い。

(参考文献) 伊藤博著「万葉集釋注」林田正男著「万葉の歌」中西進著「万葉の歌―人と風
土―」外

